

国内研修報告書

目次

はじめに

1. 宗教都市天理について

a. 市の由来

b. 特徴的な建物から見る天理

c. 天理教の浸透

2. 奈良町について

a. 奈良町とならまち

b. サービス業の町

c. 講と会所

d. 信仰で成り立つ町

おわりに

はじめに

今回の研修にあたって協力して下さった皆様に厚く御礼申し上げます。

私は、長くその地にある仏教（寺）、神道（神社）を始めとするいわゆる地元の宗教が地域にどのような影響を及ぼし住民と関わってきているのかを学ぶために、この研修を企画した。奈良町については奈良まちづくりセンター様、御霊神社様、元興寺文化財研究所様、天理市については山本初子氏にお話を伺い、町を歩き回ることを調査手段とした。

研修を行う前に私は宗教とコミュニティは親和性が高いのではないかと仮説を立てた。その地に長くある宗教は長く行われてきた儀式を受け継ぐ人々（コミュニティ）を中心に、氏子をはじめとするある程度の信仰の伝統を地域に持つと考えたためだ。この仮説を基に今回の報告書では主に天理教本部がある天理市について、そして奈良町の自治に関係する信仰について報告する。

1. 宗教都市天理

a.市の由来

天理市は 1953 年 10 月から実施された「昭和の大合併」、つまり日本の第 2 次大規模市町村合併政策によって 1954 年 4 月 1 日に発足した。その前身町村は山辺郡丹波市町、同郡二階堂村、同郡朝和村、同郡福住村、磯城郡柳本町、添上郡櫛本町である。市の名前の由来になった天理教は、19 世紀末から教祖の故郷であり今の天理教本部がある丹波市町の発展に貢献し、天理教の巡礼などが町の経済発展を支えてきた。そのような経緯から昭和の大合併の際、新市の名前は天理教に因んで天理市になったそうだ。日本唯一の宗教都市の始まりである。

b.特徴的な建物から見る天理

天理駅で電車を降りたとき、私は「ようこそおかえり」と書かれた大きな横断幕と独特な形の建物が数多く立ち並ぶ見慣れない景色に出迎えられた。初めはその光景の異様さに驚いた。町を歩いていくうちに、「第〇〇母屋」とある建物も増えてきて益々普通の町との違いを感じさせている。建物群について山本氏に話を聞くと、ようこそおかえりとは天理教では本部の建物がある場所（正確に言えば本部内にあるかんろだいと呼ばれる場所）は人類が創造されたところだという考え方があり、子が親元に帰るように生まれた場所に帰ってきたという意味からようこそおかえりという文言が掲げられているそうだ。また、独特な形の建物は天理教が関係している学校や病院などの施設であり、信者からは詰所と呼ばれている母屋は主に「こどもおぢば帰り」という夏に全国の子供を中心とした信者が天理に集まるイベントで信者の宿泊施設やとして利用されているものだという。全部で約 230 か所が本部を中心に点在しており、その事情によるそうだが夏のおぢばがえりの期間以外は教徒が住み込みで管理するそうだ。私はこのことから、天理教は視覚的な意味でも生活に必要な施設に関わっているという点でも地域に非常に溶け込んでいると感じた。

c.天理教の浸透

駅目の前から続くアーケード商店街に足を踏み入ると、夏に来る子供たち向けのお土産店の他に、天理教の祭壇や定期的に行う儀式的な行為である「おつとめ」の時に着用する服と用具、楽器、信者が着る半被の専門店が目立った。今回は見ることがかなわなかったが、コロナ禍の前は駅前広場で半被を着て教えを説く信者の姿があったそうだ。このような町の様子から、本部のある天理駅周辺は特に天理教の影響を大きく受けていることがわかる。

以上のことから、天理教本部周辺においては私の「宗教とコミュニティは親和性が高いのではないか」という仮説は天理教と市の様子において成り立つのではないかと考える。

2. 奈良町について

a. 奈良町とならまち

奈良町について、まずはその成り立ちと元興寺との関係を解き明かすことから始めたい。奈良町は時に「奈良町」、「ならまち」と呼び分けられることがある。奈良町とは地域の範囲的な意味で、東西南北毎に境界の目安がある場合もあればはっきりとしていない部分があるそうだ。ならまちとは、元興寺の旧境内の土地を指す。元興寺は衰退とともに付近の建物がなくなった場所に人が住み始めることで段々と町が形成されてきた。そのため町にはあちこちに「ここは元興寺境内のこのような施設がかつて存在した場所であった」という案内が散見された。

b. サービス業の町

寺院をもとに町が形成されたことを説明するにあたってキーワードとなるのは「サービス業」という言葉だ。元興寺文化財研究所の高橋さんいわく、784年の長岡京遷都後に残った寺社が荘園領主としての地位を持ったため僧は立場があり、生産活動には参加することがなかったそうだ。そのため、お経を唱えに行くなどの所謂サービスを提供することが主な仕事で、その僧たちの生活をサポートするために商人などのサービス業の人々が寺院の周りに移り住んできた。つまり元興寺の僧と僧の生活を支えることで発展してきた商人を始めとする町民はこの町を語る上で外すことができない存在と言える。

c. 講と会所

奈良町は信仰の町である。その要因の一つに講、会所と呼ばれる、自治組織がある。寺院と住民の需要と供給の関係が増えるにつれて門前町の規模が大きくなり、それを小さく区切って自治組織を置いたのが会所の始まりである。よくある自治会との違いとして、講は寺院や神社の社務所などに「会所」という寄合の場を構え、そこに仏像などその町ごとの大事なものを祀るという点にある。例えば井上町会所には十一面観音立像2体が祀られ、女性のみが参加する観音講の法要が毎月営まれている。奈良まちづくりセンターさんによると町ごとの大事なものは仏像に限らず、曼荼羅や掛け軸の例も見られる。そこには仏教、神道の分け目はない。古くから大切に受け継がれてきた御本尊を奈良まちづくりセンターさんと講についてお話していく中で、会所を支える戸数の減少の問題について話す機会が

あった。講毎に祀っているものを次の講まで保管する当番と毎月の儀式の人員の不足による、口伝で在り方が伝わっていた講の衰退が今後考えられる。私は他の講で採用されている萬覚書という運営等を書き記した書物のように、マニュアルを作れば他の人が引き継ぐことで講を守ることができるのではないかと始めは考えていた。しかしそれでは形だけを守るために講を行うことと同義であり、本来の意味である地域住民の寄合ではなくある意味儀式化された行為になってしまうのではないかと気が付いた。会所、講とはこれまで通り住民に情報を伝えたり集まってお祝いをしたりするような「必要だからある場所」でないといけないのだと痛感した。

d. 信仰で成り立つ町

奈良町は歴史的に仏教寺院に起因するルーツを持ちながらも、講が例に挙げられるように宗教観は1つの宗教にこだわりを見せない。御霊神社の藤井貴弘さんによると、「この地域に突出した宗教観はなく世の中と変わらず宗教の入り混じる行事を取り入れている」とのことだった。これだけ聞けばほかの地域と何ら変わらないしごく当たり前な感覚だと思えるが、信仰と宗教という言葉の意味を神仏習合の概念から考え直すと意味が変わってくる。神仏習合以降、僧が神職となり神道の神が仏教の神に存在を重ねられるなど仏教と神道の垣根があいまいになった。当時の人々この二つの違いを明確化せず、理解の及ばないことは全て鬼の仕業、手に負えないことは各々の講の御本尊に縋るという姿勢であった。その影響もあり奈良町では主に仏教と神道との宗教の垣根が低く、純粋な信仰を精神的紐帯として町の共同が強められることとなったのだ。

この奈良町の事例に対しても、私の仮説は正しかったといえる。市民は特定の宗教に依存せず共同体的性格を古くから守り継いでおり、生活にその信仰がしみ込んでいるように見えた。

おわりに

天理市では市の景観や成り立ち、関連施設から、天理教が本部周辺の地域に浸透していることが分かった。ただ今回は天理市において山本氏のお話と町の様子からしか判断することができなかった。本部付近にも石上神宮を始めとする天理教以外の宗教施設が複数存在するため、次の機会には天理市の市民団体にお話を伺い、本当に地域は天理教一色であるのか伺いたいと考えた。

また、奈良町では天理市のように景観から見てわかるような宗教性はなかったが、人々が生活とともにある信仰を古来より大切にすることで生まれる、コミュニティの共同があった。

今回の研修から、地域（天理市、奈良町）に根付く宗教はその形は様々でありながらも、地域との親和性は非常に高いものであるということが分かった。

参考文献

公益財団法人元興寺文化財研究所「奈良県の南玄関」京阪奈情報教育出版株式会社
2021年7月

岩井宏實 「町の共同体と奈良町会所」国立民族学博物館研究報告第三十三集 国立歴史
民俗博物館 1992年